

多職種グループセッションにおける拡張的ダイナミズム

—— 「ストップ虐待・親支援の在り方検討会議」の振り返りから ——

Expansive dynamism in interdisciplinary group sessions
— From reflection of the “Review Meeting on Stop Abuse/Parental Support” —

児童学科 吉澤 一弥 西 智子
Dept. of Child Studies Kazuya Yoshizawa Tomoko Nishi

抄 録 筆者らは、多職種協働による「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」の活動展開の拡張的ダイナミズムについて、2つの概念モデルの創出プロセスを題材に分析した。ひとつは、「親を加害者にしない支援のヒント集」の構想としての概念モデルである。トップダウンのマニュアルを作成したい保育実践者側の立場と、活動のボトムアップ的拡大を重視する筆者らの立場のジレンマが明白になった。これが動因となり、解決策としての概念モデルの創出につながった。もう一つは、保育園の「一日保育参加」の新たな意味づけである。保育園スタッフの不全感と疑問が問題状況を構成し、枠組みの転換により、保育者と親における「こどもの成長の喜びの共有」の概念形成と実践がデザインされた。この概念モデルは、子どもの人権意識を啓発する支援者研修や保育学生の教育に用いられる拡張性を有すると考えられる。

キーワード：ジレンマ、拡張プロセス、グループセッション、支援のヒント集、
こどもの成長の喜びの共有

Abstract The authors analyzed the creation process of two conceptual models in the interdisciplinary “Review Conference on Stop Abuse/Parental Support”. One is a conceptual model as a design for “a collection of hints for support that does not make parents perpetrators.” The dilemma between the position of childcare practitioners who want to create a top-down manual and the position of the authors who want to emphasize bottom-up expansion of activities has become clear. This was the driving force that led to the formation of the conceptual model. The other is a new conceptual model of “one-day childcare participation” in nursery schools. The sense of inadequacy and doubts held by nursery school staff constituted the problem situation. The reframing was guided by the concept formation and practice of “sharing the joy of children’s growth” between nursery school teachers and parents. This conceptual model is considered to have the expandability to be reflected in the training for raising awareness of children’s human rights among nursery school teachers, and the education of nursery school students.

Keywords: Dilemma, Expansive process, Group session, Collection of hints for support,
Sharing the joy of children’s growth

はじめに

筆者らが展開した、「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」（以下、検討会議）は、多職種が対話手法を用いて行った集団的プロジェクトである。

その中から、拡張的プロセスが明らかになった2つの実践例を題材に分析することを本稿の目的とした。

まず背景となった「検討会議」の成り立ちを以下に概説する。

2018年の東京都目黒区の幼児虐待死事件や2019年の千葉県野田市の小学生女児の虐待死事件など痛ましい虐待死事件の報道が盛んになされ、児童の人權に対する社会全体の危機意識が高まった。それに呼応するように「しつけにおける体罰禁止」、「親の懲戒権の見直し」の法改正の動きが加速された。

子育て支援の指導者のひとりである村上（熊本市・山東こども園）は、1年後に迫った体罰禁止への法改正を前に、子育てをする親の不安の増大や子育て支援者の対応における混乱を懸念し、とくに「親を加害者にしない」という視点から子育て支援者のための対応指針を策定したい旨、筆者らに協働プロジェクトの企画を呼び掛けた。

・・・国会では体罰の禁止に向けて法律の改正案が提案されました。体罰の禁止は喫緊の課題であります。子育ての現場では「しつけ」と「体罰」が混乱し、「育児不安」から「育児崩壊」にいたる懸念も生じてきます。そこで「子どもを被害者にしない」、「保護者を加害者にしない」という2つの視点が考えられます。前者はいわゆる虐待の防止・発見・予防といった専門職としての視点ですが、これは言い換えれば親が虐待をしているのではないかという疑いをもつ視点でもあります。一方後者は、親の不安や負担感、大変さを丸ごと受容して包括的に親子を支援していくという共感的支援の視点です。この複眼的な視点を参加者の皆さまとともに明確にして、子育て支援者の役割と子育て支援のあり方、実践の方法を検討して全国の保育・子育て支援者に発信したいと思えます。(村上²⁾)

体罰禁止の法律の制定は、1979年のスウェーデンが最初であり、我が国の今回の法律改正は、世界で59番目となった。遅ればせながらもこれは子育てや子育て支援にパラダイムの変更を迫る画期的ともいえる出来事と考えられる。

こうした状況を踏まえて、筆者らは2019年4月～2020年3月まで日本女子大学特別重点化資金を得て、虐待支援研究班を設立して「検討会議」とそれに関連する活動を企画した。活動拠点を児童学科におき、吉澤、西、村上を中心とするコアメンバー

が対話を重ねながら「検討会議」を各地で開催した(表1)。

「検討会議」では、子育て支援者の役割・子育て支援のあり方・実践の方法について、多職種グループセッションによる情報共有と意見交換がなされた。そして支援者にとって新たな方策を自らの手で生み出す方向にデザインされた。その構造は、虐待問題の専門家による現状分析の講演の後、参加した保育者や子育て支援者を中心とする多職種のメンバーがスモールグループに分かれて、用意されたテーマを中心にディスカッションを行うという形態(以下、グループセッション)である。

筆者らは、コアメンバーによる戦略会合を「検討会議」の前後に実施し、グループセッションでの論議や提案の集約と次回以降の実施プランを策定した。つまり参加者によるグループセッションとスタッフミーティングという2つの対話ユニットが両輪となりプロジェクト全体を推し進めた。

「検討会議」の参加者は、児童虐待防止という目標は共有しているが、多職種の集合であるがゆえに、立場や考え方の違いが存在する。実践的立場や状況、支援の考え方の方向性、寄って立つ学問的背景、そしてルールなど多岐にわたる相違がぶつかりあいながら対話は進められた。保育者がそれぞれの子育て支援現場で直面する葛藤状況もグループセッションの中で明らかになった。これらを、グループやスタッフミーティングにおける対話と交渉により乗り越えようとするのがプロジェクトの特色でもある。

以上が「検討会議」の成り立ちと性質であるが、本稿で題材として取り上げる2つの実践例の一つは「親を加害者にしない支援のヒント集³⁾」(以下、支援のヒント集)創出プロセスである。もう一つは、「検討会議」と並行して実施した保育園での多職種のグループセッションで生み出された、「こどもが成長する喜びの共有」という概念の創出プロセスである。

いずれの場合も、ジレンマや疑問の共有に端を発して、現状の打破に向けての既存の文脈の変革が求められ、それを動因として新たな概念モデルの形成プロセスが展開した。

表1 「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」とその関連企画（出典：吉澤ら）

日程	会場	開催名	講師・演者	主要テーマ
2019年 6月23日	日本女子大学	第1回東京開催	倉石哲也 三樹優子	体罰禁止を親にどう伝えるか
8月30日	熊谷市・なでしこ保育園	熊谷開催	山岸恵理子 高田綾	オヤツと思うこと、その場合にどうするか
9月6日	熊本市・こども文化会館	熊本開催	倉石哲也	村上の構図の検討
9月17日	東村山市・八国山保育園	園内勉強会	吉澤一弥 西智子	不可視化の心理
9月29日	日本女子大学	第2回東京開催	磯谷文明	親を孤立させないためにそれぞれの立場でできること
10月28日	大阪市・関西大学	活動理論学研究会	吉澤一弥	活動システムへの介入研究
11月11日	熊本総合子育て支援センター	イベント企画	吉澤一弥 西智子	叩きたくなくなったらどうするか 笑顔の子育て
11月29日	甲府市・記念日ホテル	第10回ここネット 全国大会	吉澤一弥	「支援のヒント集」の解説と中間報告
2020年 1月25日	日本女子大学	第3回東京開催	山縣文治 後藤英一	子ども虐待の状況と支援のあり方、 世田谷区の包括的な取組

実践例1：「支援のヒント集」の創出プロセス

(1) 「検討会議」におけるグループセッション

「検討会議」の冒頭で、筆者らが活動の趣旨確認とこれまでの流れのアウトラインを説明した後、虐待問題の専門家が講演を行った。講演者は、児童相談所の職員、社会福祉系の研究者、弁護士、自治体の子ども家庭支援部署の職員などであった。この人選も多分野にわたることが特徴である。そもそも虐待問題は、ある特定の分野や領域だけで対応しきれない問題ではない。

「検討会議」の参加者は、専門家の講演を聴くことで問題意識を再確認し現状分析を行った。スモールグループに分かれて、「体罰禁止を親にどう伝えるか」「おやっと思うことがあるか、その場合どうするか?」「親を孤立させないために何ができるか」など、主宰者が準備したテーマに沿って（ときにテーマの枠を超えて）活発な対話を進めた。解決策として提案されたモデルのいくつかは、参加した保育者が自園に持ち帰り、即日実施するといった迅速な動きもみられた。

筆者らは、各地で展開された「検討会議」のグループセッションで明らかにされた課題や解決策としてのモデルを収集し、それを題材に「支援のヒント集」を作成し、半年後の「第10回子ども・子育て

支援全国大会 in 甲府」で支援者に配布する構想に至った。

「支援のヒント集」を見た村上は、「こういう形でまとめられることは想定外で思いがけないこと」「秋の全国大会での配布に間に合った」とコメントした。「支援のヒント集」というツールの考案と執筆を担当した筆者らとしても、こうした形でまとまるという目算は当初持っていなかった。

この支援ツールの創出の出発点は、スタッフ間における方針を巡ってのジレンマへの直面であった。トップダウンのマニュアルを作成したい保育実践者側の立場と、活動の参加者からのボトムアップ的拡大を重視したい筆者らから大学研究者の観点があつた。これに加えて、秋の上記全国大会にプロジェクトの成果物を配布するという時間的制約もあり、これらの条件をすべてクリアすべくスタッフミーティングでの対話と交渉が繰り返された。こうしたプロセスを経て「支援のヒント集」のアイデアが生まれたのである。

それは用意されたマニュアルを支援者に投げかけるのではなく、考えるヒントや道筋を提供するための物理的な思考ツールの提供という形での物質的な具体化であった。

(2) 「支援のヒント集」の構成

筆者らは、「検討会議」のスマールグループでの討論で明らかにされ生成された課題や解決策のモデルの中から、支援者が子育て支援現場や保育園でとくに直面し易いと想定されるテーマを11項目抽出した(表2)。

11項目のテーマはどれも参加者の切実な思いであり、変革への意欲の結晶ともいえる。この知は、実践者の過去の経験という歴史性の再吟味による新たなアイデアの創出という未来志向の価値を持っている。「支援のヒント集」を手にとって、「体罰禁止の法律改正」による子育てのパラダイムシフトを踏まえた新たな支援方法について、支援者が自分事として考えることを促すことが期待される。

サブテーマのいくつかを表記する際に、「保育者の眩き」という表現を用いた。また子育て支援者がヒントとして実際に使いやすいように、思考プロセスに沿った4段階モデルを導入した。それは、「◇課題や問題提起、◇ストップ事項、♡ヒント、◇解説」の順に並べられている。

「◇課題や問題提起」で示したテーマは直面するジレンマを具体例から帰納的に可視化し、その上で「◇ストップ事項」として明白な禁止事項を示した。一方であるべき姿や理念を示すことでジレンマを乗り越えるための「♡ヒント」とした。思考プロセスと自発的な認識創造が確認できるように「◇解説」を4段階の最後に記した。

表2の中の5番目のサブテーマ「まあ、親なのにこれもできないの」を例に詳述する。「◇課題や問題提起」の記述部分を『 』で引用する。

『育児の専門家はいません。多くは初心者同然で

す。一方で、保育者は知識と技術を兼ね備えた専門職です。また当然ながら、育児と保育は同義ではありません。「こんなことができないの」「みんなやってるわよ」「お子さんのことをまず考えてますよね」「〇〇するのがベスト(家庭状況がさまざまであるのに)」「お子さんはこう思っています(断言)」「園ではできています」「こんな簡単でしょう」「大学出てるのにわからないの」「最近の親は何を考えているのかしら」などと感じたり思わず言うことはありませんか。これらの言葉は、処罰感情(懲罰感情)の反映と考えられます。』(支援のヒント集 p.7)

つまり支援者の親に対する処罰感情がここではテーマになっていることが明示され、「◇ストップ事項」として書かれている。そして「♡ヒント」では、支援とは親が喜べる子育てを促すことであるという、本来の支援の目標が示される。

この2つは支援者がつい行いがちな慣習的な応答に意識を向けさせるとともに、あるべき姿を同時に指し示すことで、支援者それぞれが現場の実状に則した解決策を見つける方向を強く促すものである。

実際に、その後の保育園での多職種によるグループセッションにおいて、「支援のヒント集」を読んだ保育者から、処罰感情(または懲罰感情)をめぐる過去の反省から新たな認識に至った経験が語られた。それは、「子どものための視点」から「親がどうしたいのかという視点」への親支援の視点のシフトであり、親との関係が格段に改善したことが窺えた。

表2 「支援のヒント集」のサブテーマの項目(出典:吉澤ら³⁾)

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1・体罰禁止と懲戒権見直しの法改正が決定 2・体罰容認が6割-しつけの全国意識調査- 3・山菜取りで子ども置き去りにした事件 4・保育者の眩き「今日も同じ服を着てるね、きっとお気に入りなんだね」 5・保育者の眩き「まあ、親なのにこれもできないの」 6・保育者の眩き「これって虐待? 通告しなければ・・・」 7・保育者の眩き「この親、特別??」 8・親の眩き「いや、私はこうしたいです」 9・体罰なき躰の支援に特効薬なし!? 10・保育者の眩き「結局どうすればいいの・・・」 11・精神科医や犯罪心理学者の眩き「タイムマシンで過去に戻れば・・・」 |
|--|

・・・いろいろ思い返して、自分がやって失敗だったなっていう過去の保護者への対応があって、やっぱり懲罰感情のところ、子どものためにという視点でお母さんと話し合ったんですけど、お母さんにとっては話せば話すほど負担で辛かったって。裏を返せば。これってちょっと違うんじゃないかって。いろいろやっていく中でお母さんも体調を崩してしんどそうだったときに、どこを一番心配しないといけないかって、お母さんを一番気かけないといけないって思ったんです。お母さんが良くなるのが子どもに伝わる。逆の視点になったときに、お母さんとの関係もよくなったんです。そこで。一方的にこうしてああしてじゃなくて、お母さんはどうしたいのかな、どこがしんどいのかな、じゃあ保育園は何が出来るっていう風に、お母さんと距離を縮めたときに、お母さんが変わって、子どもも変わったことがあったんです。保育士はつい押し付け、ああしたいこうしないといけないって、やればやるほどいろんなケースを見るにつれてそうしちゃうけど、やっぱり人によって違うし、絶対押し付けはしちゃいけないって。・・・「支援のヒント集」を読んでお母さんがどうしたいのかを一番考えないといけないと、そこが気を付けないといけない所なんだなって改めて感じました。(保育園での多職種グループセッションに参加した保育者、下線は筆者による)

もう一つの例は、表 2 の中の 11 番目の「精神科医や犯罪心理学者の眩きータイムマシンで過去に戻れば・・・」に対する読後感である。他職種との比較による気づきが認められた。

「タイムマシンで過去に戻れば・・・」という精神科医や犯罪心理学者の眩きが印象に残った。保育者のアドバンテージである、子どもの今現在と近未来を扱える立場にあることに、あらためて気づかされた。(保育園での多職種グループセッションに参加した保育者)

(3) 理論的考察

多職種協働による活動は、各専門分野の学問体系や価値観、研究倫理とルール、実践家の教育システムなどが大幅に異なる者同士で行われる。そのため「子育てと体罰禁止」という共通テーマであっても、それぞれの専門分野のアプローチや慣習などの前

提問で対立が起こりうる。

ユーリア・エンゲストローム (Yrjö Engeström) は文化・歴史的活動理論 (cultural-historical activity theory) において、こうした状況を複数の活動システムの境界横断 (boundary crossing) あるいは相互浸透と呼んだ。そして直面する矛盾や葛藤を動機として、慣習やルーチンといった既存のモデルを脱却し、解決策となる代替モデル「いまだここにはないもの (what is not yet there)」を発見する動きを拡張プロセスとして示した⁴⁾。

「支援のヒント集」の創出プロセスにおいては、トップダウンのマニュアルを作成したい保育実践者側の立場と、活動の参加者からのボトムアップ的拡大を重視したい筆者らの観点がジレンマを生み、この葛藤がその後のスタッフミーティングにおける対話を活性化する動機となった。これはエンゲストロームの拡張プロセスの考え方に合致するといえよう。

ジレンマと、成果物配布の時間的制約という条件の中で、筆者らは「検討会議」のグループセッションで生まれた課題やアイデアを収集して、中心的な素材と位置づけた。これにより、スタッフミーティングの論議の対象が、「題材との対話」に焦点が移行し、「支援のヒント集」の着想につながった。これは、エンゲストロームのいう「いまだここにはないもの」の生成であり、ジレンマを乗り越える弁証法的な解決と言えよう。

また、「題材との対話」に焦点化したことは、ドナルド・ショーン (Donald Schön) が「行為の中の省察」として示した解決手法に符合すると筆者らは考えた^{5) 6)}。

ショーンは、互いに競争関係にある精神療法の諸学派が、自らの理論と実践は他とは相容れないものと主張している点について、多様な学派の治療実践を描き出す試みから、実は共通の対象を共有していることを発見した。多くの精神療法の流派は患者一人ひとりをそれぞれ唯一固有の事例として見做す共通の傾性をもっている。「行為の中の省察」の観点からは、固有の問題に治療対象を焦点化し、治療介入をデザインするという点において相違は存在しないとした。

「支援のヒント集」の場合も同様の論理で「題材との対話」への焦点化なされたことで、対立が解消されたのである。

「支援のヒント集」を熟読した保育者の処罰感情への着目と振り返りから、親支援の視点の移行の様子が窺われた。これまで行ってきた子どものための視点での親支援は、親にとって辛い感情を引き起こすだけでなく支援者と親の関係を損ねてしまうという反省があった。新たな親支援は、親がどうしたいかをまず受けとめ尊重することから、押し付けではなく親の自己決定のプロセスを促進させた。視点の移行により、支援者と親の関係性も改善され良好に保つことができた。この振り返りは、グループセッションの中で個人史の洞察にまで踏み込んだ深いナラティブとして語られた。

「支援のヒント集」のもう一つの読後の感想として、別の保育者が「タイムマシンで過去に戻れば・・・」を取りあげた。子どもの今現在と近未来を扱える保育者のアドバンテージへの気づきであり、他分野との相違や補完性への認識を鮮明にするエージェンシーと考えられる。

このように「支援のヒント集」は、支援者が個人的に気になる未解決のテーマへの没頭と振り返りを促し、気づきや見直す機会を提供した。その意味で、「支援のヒント集」は拡張的な概念ツールとしての潜在性をもつと考えられる。

実践例2：保育園で実施した多職種のグループセッション

(1) テーマとメンバー構成

筆者らが熊本県と東京都などの保育園で実施した多職種によるグループセッションのテーマは「保育園におけるマルトリートメント事例の検討」である。保育園は、マルトリートメント場面に遭遇する機会がありうる。グループセッションでは、保育園が経験した事案について、現状分析と今後に向けてのアイデアについて率直な意見交換がなされた。メンバー構成は園長を含む保育者、保育学・幼児教育学、精神医学の研究者などであった。

提示する東京都のA公立保育園での個別のセッションを俯瞰するために、各保育園で実施したグループセッション全体に対して筆者らが抱いた印象を最初に記す。それらは、マルトリートメント事案が発生した際に、外部機関から保育園に対応を「丸投げ」されて孤軍奮闘する保育園の姿と、日常業務に忙殺されてゆとりのない保育園の現状である。そうした中で、今回の多職種グループミーティングの

企画は、稀有で貴重な機会となったようである。

・・・子どもと保護者に対する保育園のスタッフの暖かな眼差しがあり、頼れる子育て支援実践家集団であった。様々なタイプの親に、とことん寄り添う保育園の役割が浮かび上がってきた。反面、不適切な養育に関して「仕方ないよね…」「この程度なら…」といったように、見過ごしてしまうことも起きていると、過去を振り返り語る場面もあった。

処罰感情については必ず話題になった。これも、「保育園で何とかしたい」という思いの中から生まれているとも言える。日々の保育を通じて、体罰なきしつけのモデルとして機能したいという思いが感じられた。保育を可視化し、環境を通して行う支援を実践している意味は大きい。

一方で、気になったことは、支援業務そのものに対して保育者側からのアピールが足りないことである。他の機関に働きかけることが少ないために、地域によっては、他機関から「見守り」と称する期待感の中で、丸投げ状態で保育園が親子を支えている現状も垣間見ることができた。

虐待対応は保育者の熱意と努力だけでは難しいので、もっと声を上げ、連携を具体的にしていく必要がある。保育の現場には、スタッフの熱意を支えるだけのゆとりがないことは常に指摘されている。園長からは、「先生方の負担が大きいけど…」「今回の話し合いでケース課題を再認識できた…」等の声が聞かれた。それは日常の保育業務の多忙さと個別ケース検証をするゆとりのなさを物語っている。(筆者ら)

(2) 「一日保育参加」を巡って

A保育園では、マルトリートメントの早期発見・早期対応の方策として、園と保護者の関係作りの重要性が意識されていた。その一環としての保護者の「一日保育参加」を実施してきたことがグループセッションで話題にされた。A保育園では「一日保育参加」のあり方に不全感や疑問を抱きながらもルーチンとして継続的に実施していた。

筆者は、その語りのニュアンスから不全感や疑問を払しょくするような、効果的な観点が探し求められていると感じた。「一日保育参加」の語りの中で、保育者が親に対して、子どもの遊び内容を言語化して伝えている場面があったので、筆者はそこを捉え

て「親に通訳していますね」と介入を試みた。

・・・子どもたちが遊んでいるのを横目で確認しながら親に解説したら、「何やっているか分かって面白かったです」と言ってくださったんです。うちの子、ふらふらしてるだけと思ってたっていたのが、そうだったんだ、面白いんだうちの子って、というように見方が変わってもらえたのは良かったねって話をすることがあります。(多職種グループセッションに参加した保育者)

グループセッションでは、「通訳している」という介入を契機に、子どもの動きや遊びに対する理解や認知に保育者と親の間で大きなギャップがあることが明確化された。つまり、保育者には自明なことが、親にとっては必ずしもそうではないという点である。

そして「親が子どもの小さい変化や発達に気がつければ、子どもとともに心から喜べる」という話に展開した。そしてしばし沈黙考していた園長は、「これまでの一日保育参加の目的とやり方を見直したい」という方針転換を口にした。

これまでは「保育参観」を目的としてきたが、これからは、保育者の専門性(子どもの動きの変化を微細にとらえる能力)を生かして親に伝え、「凄いことが起きているのだ」という気づきや驚きを親と共有する方向への切り替えである。こうして、「一日保育参加」の目的(活動の対象)は、こどもの成長の喜びの共有に変化した。

「成長の喜びの共有」がマルトリートメントの解決の下地としての鍵概念になること、そして親と保育者の信頼関係の構築の要素になることが確認された。筆者らは、後日のスタッフミーティングで、子育てを苦痛や単調なものと感じている親にとって、子育てのイメージや在り方を変革するキーワードになると考えた。

(3) 理論的考察

ショーンは、問題状況を整理し捉え直すのに、枠組みの転換(reframing)をツールとして置いた⁵⁾。問題状況が枠組みの転換により捉え直されると、手立てを講じること、結果を見出すこと、新たに意味づけること、評価した上でさらに手立てを講じることという一連の循環が生じる。この組み合わせは、問

題状況に新たな意味や価値を見出すことに加えて、予期せぬ変化をもたらす。それは、枠組みの転換を契機として、新たなナラティブにつながる。そして、次のサイクルと新たな枠組みの転換を生むとした。この思考プロセスの循環モデルを「省察的対話(reflective conversation)」として概念化したのである。

A 保育園のグループセッションにおける「こどもの成長の喜びの共有」という概念モデルの創出の対話プロセスは、ショーンのいう省察的な対話構造を示している。「一日保育参加」の行事を不全感と疑問を感じつつも実践していることが問題状況であり、「通訳している」という介入が枠組みの転換として採用されたことから新たなナラティブが展開されたと考えられる。

「成長の喜びの共有」というアイデアは、筆者らのその後の保育者向けの子どもの人権擁護を論点とした啓発活動にも生かされた。子育てにおいては、「子どもにはもって生まれた成長する力」があり、「親とは違うひとりの人間」であることへの気づきが重要である。日本では諸外国に比べて親子中心が多いことが指摘され、「親とは違うひとりの人間」という意識が希薄な日本文化が存在する。子どもは親の持ち物でも親を喜ばすために成長発達をするわけではない。子育てをする親や保育者は独立した個人としての子どもに向き合うのである。

さらに「成長の喜びの共有」という概念は、ストレスが多くて辛いものという否定的な子育てイメージを、潤いと喜びのある魅力的な子育てイメージに変化させる潜在性を秘めていると期待される。

エンゲストロームは、集団の活動や対話の中で引き起こされる変革のプロセスを、文化・歴史的活動理論で展開して⁴⁾。活動の担い手(メンバー)が、目の前の実践の中にある矛盾に直面することを出発点とし、協働の問題分析を自ら進めることによって、自分たち自身の未来(対策)をデザインし実行することを第一義的なものと考えた。それは、伝統的な学びのオルタナティブとして、対象(活動の目的)を作り変えるとともに自己を作り変える活動を集団的に創造していくプロセスである。拡張(expansion)とは、生活や活動に課せられた諸条件に対して、担い手たちが自分たち自身によるコントロールを強める動きである。エージェンシー(agency)とは、「自分たちの周りの世界と自分自

身の行動を変えていく能力と意志」であり、与えられた条件や環境に疑問や批判を向けながら、未来を自分たちの手に握る変革の持続であるとした。

拡張とエージェンシーの概念を用いて、「一日保育参加」の意味づけの変化、つまり親が子どもと保育者のかかわりを見せる(参観)から、「こどもの成長の喜び共有」という意味に変化したプロセスを解釈できる。

さらに「こどもの成長の喜び共有」の概念モデルは筆者らの啓発活動や保育学生の教育にも反映されたことから、エンゲストロームのいう拡張的プロセスの出発点となる抽象概念としての胚細胞(germ cell)に相当すると考えられる。胚細胞とは、問題の説明的関係性を含む出発点としての抽象概念であり、一步一步豊かにされ絶えず発達し多面的に現れる具体化活動システムへと転換される。これは抽象から具体への上向という弁証法に基づく思考である。

おわりに

筆者らは「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」のプロジェクトから、2つの概念モデルの創出プロセスに見られた拡張のダイナミズムを分析した。概念モデルのひとつは「親を加害者にしない支援のヒント集」の着想であり、もう一つは保育園の「一日保育参加」の新たな意味づけとしての「こどもの成長の喜びの共有」のアイデア形成である。

いずれも多職種協働によるグループセッションの対話の中で、直面した対立や矛盾を出発点に拡張プロセスが進展し、解決策としての新たな概念が形成された。同時に参加者のエージェンシーが活性化されたと考える。ダイナミズムを分析するにあたって、ショーンの「題材との対話」と「枠組みの転換」、

エンゲストロームの集団的な対話による「拡張的学習」の理論を参照した。

参考・引用文献

- 1) 吉澤一弥, 村上千幸, 西智子, 松原乃理子 (2019): 2019年度報告書「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」日本女子大学虐待支援研究班
- 2) 吉澤一弥, 村上千幸, 西智子, 松原乃理子 (2019): 報告書 第1回「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」日本女子大学虐待支援研究班
- 3) 吉澤一弥, 村上千幸, 西智子, 松原乃理子 (2019): 『親を加害者にしない』支援のヒント集 - 「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」の討論より - 日本女子大学虐待支援研究班
- 4) Y.エンゲストローム著 山住勝広監訳 (2018): 拡張的学習の挑戦と可能性 いまだここにはないものを学ぶ 新曜社
- 5) D.ショーン著 柳沢昌一・三輪建二監訳 (2007): 省察的实践とは何か 鳳書房
- 6) 吉澤一弥 (2021): 精神医学と保育学をつなぐ D. Schön の「状況との省察的対話」の理論—協働的活動における他分野理解の試みから 日本女子大学家政学部紀要第68巻
- 7) Y.エンゲストローム著 山住勝広訳 (2020): 拡張による学習 完訳増補版 新曜社

※本研究は、日本保育学会と日本多機関連携臨床学会の倫理規定を遵守して実施した。

※本研究に関して、利益相反はありません。